

モダニズム建築のメッセージ 2

昨年暮と今年年始に、東京と大阪の二つの中央郵便局を見に出かけた。その姿と行方が気になりで仕方なかったからである。すでに報じられているように、これらの建物については、この間、日本建築学会、日本建築家協会、「東京中央郵便局を重要文化財にする会」などからの保存要望書の提出や超党派の国会議員による著名活動、さらには、設計者・吉田鉄郎(1894～1956年)の出身地にある富山テレビが制作したドキュメンタリー番組「平凡なるもの～吉田鉄郎物語～」の放送など、保存を求める幅広い運動が粘り強く展開されてきた。けれども、そうした中、先を急ぐかのように再開発計画が相ついで発表され、いずれの建物も超高層ビルへの全面建替えが目前に迫っている。

訪れると、「東京中央郵便局」(1931年)は、閉鎖されて使われておらず、建物名は目隠しを施され、時計も12時を指したまま動きを止めていた。法的な審議も未了だというのに、新しい建物の建築計画が掲示され、すでに施工者も決まっているのだという。正面入口には移転先の案内図などが無造作に張られ、建物は半ば夜逃げ同然のように捨て置かれていた。この扱われ方そのものに、70数年という長い時間にわたって、近代を形作った郵便事業の中核のシンボルとして、何よりも東京駅と共に首都の顔として、戦争と復興を見続けてきた建物への敬意など微塵も持たない無神経さが現れている。「丸の内駅舎が甦る」と仮囲いに記された目前

で進む東京駅の復元工事との落差は余りにも大きい。

一方、「大阪中央郵便局」(1939年)は、いまだ現役で稼働中であり、年始からたくさんの利用者が窓口にあふれていた。東京と同じように、慌しく建設工事が進む大阪駅の周辺にあって、この建物の上にだけ大きな空が広がり、落ち着いた雰囲気が醸し出され、異質な時間が流れている。ここに、地上40階、高さ187mの現在の8倍にもなる超高層ビルが立ち上がるという。そのとき、人はどこによりどころとなる居場所を見つけたら良いのだろうか。

吉田鉄郎が見つめていたもの

性急に進められる事態を前にして、それでも書きとめておきたいのは、二つの中央郵便局に込められた吉田鉄郎の建築思想である。よく知られているように、彼が若い頃から憧れ、東京中央郵便局の建設工事が進む最中の1931年に訪れた北欧スウェーデンの建築には、「どことなくふかい情趣」があり、それは、「心の糧として、また心のふるさととして、永い間自分を育ててくれた」(吉田鉄郎「スウェーデンの建築家」彰国社1957年)ものだという。中でも本人に会うことのできたラグナル・エストベリイの設計による「ストックホルム市庁舎」(1905年)は、何日も通いつめるほどの感銘を受けたと吉田は回想している。

おそらく、こうした経験を通して、また、1933年に来日したブルーノ・タウトとの交流から、吉田鉄郎は日本の近代建築のありよ

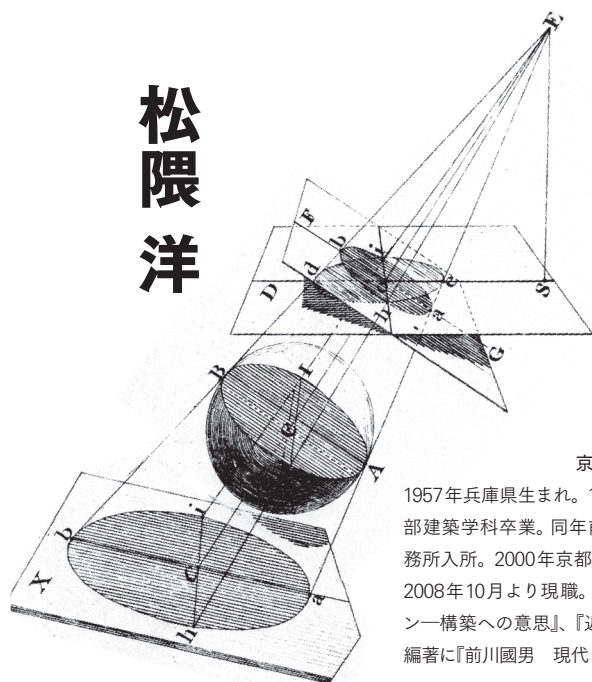
「自抑的な意匠」を求めて

東京中央郵便局(1931年)

大阪中央郵便局(1939年)

設計: 吉田鉄郎

松隈洋



まつくま・ひろし | 京都工芸繊維大学教授
1957年兵庫県生まれ。1980年京都大学工学部建築学科卒業。同年前川國男建築設計事務所入所。2000年京都工芸繊維大学助教授、2008年10月より現職。著書に『ルイス・カーン—構築への意思』、『近代建築を記憶する』、編著に『前川國男 現代との対話』など

右上 | 丸ビルから見た東京中央郵便局(撮影2008年11月)。下 | 現役時代の東京中央郵便局(撮影1999年10月)。右頁 | 大阪中央郵便局と同内部(撮影2009年1月2日)



うを自分なりに模索しようと自覚し始めたに違いない。彼が二つの中央郵便局の間に挟まれた1935年にドイツ語で執筆し、出版された『日本の住宅』は、そうした思索の結実した最初の著作であり、その後、吉田は、より広く日本の建築への思考を開始したのだろう。その当時彼が記した次のような文章が残されている。

「日本の芸術では一般に個性よりも型が尊ばれる。それは個性を尊重しないのではなく、個性を型に入れて鍛錬し、普遍的なもの、永遠的なものに高める為である。日本建築、殊に日本住宅などが類型化されているのはいろいろの理由があらうが、矢張り日本芸術に共通したこの鍛錬の精神と密接な関係があるやうに思ふ。つまり、建築家の個性を自由奔放に表現するよりも、型によって抑え、型を通して滲み出させる所に精神的な、倫理的な、高い美しさを求めようとするのであらう。(中略)実際、類型的な日本住宅で統一された住宅街などを見ると、いかにも落ち着いた、平和な感じに打たれるのである。そこには異常なもの、特別なものを建てて隣人の心を刺激したり、傷けたり、引け目を感じさせたりするのを好まない、深い慎みと温かい思遣りが感ぜられる。又、地方の町や農村を見て感ぜられる事も、矢張り類型的な町屋が軒を並べてみたり、類型的な農家が群をなしてみたりする所から生ずる、町なり村なり全体としての統一した、平和な情景である。しかし今日の都市には斯うした親和的なものが余りと言へば余りにも失はれ、個人主義的なもの、自由主義的なものがこれに代って瀾漫してゐる。どの建築も自分自身を目立たせる為には周囲との調和や街全体としての統一美などといふ事は全く顧みないといふ有様で

ある。」(吉田鉄郎「建築意匠と自抑性」『建築雑誌』1977年11月号)

この文章は、太平洋戦争下に行われた「大東亜建設記念営造計画」コンペの結果が発表された『建築雑誌』1942年12月号のために書かれ、校正まで進んだものの掲載されず、吉田の没後に弟子の矢作英雄氏によって発見された幻の原稿である。彼は、このコンペに審査員として加わっていたが、そこでは、「共栄圏の諸民族に号令する我國として、我性格を表現し我國威を宣揚する上に最有力なるもの」(佐野利器「世界第一國たる國威の宣揚」『建築雑誌』1942年9月号)として、強い「建築様式」を求めようとする勇ましい議論が支配的だった。こうした中で、吉田は、そうした潮流に抵抗して、自らの信じる日本の近代建築のありようを提示しようとしたのである。同じ文章の結語には次のように記されている。

「私達が西洋から学んだ、意匠に於ける征服的なもの、威嚇的なもの、自我的なものは果たして人類に真の平和と幸福を齎し得るものであらうか。又、私達が伝統として保持してゐる、自然的なもの、清純なもの、自抑的なもの、日常的なものは果たして消極的なものであり、退嬰的なものであらうか。(中略)否、却って清純なもの、自抑的なものこそ真に意味に於ける積極性を持ってゐると言へるのではあるまいか。(中略)自抑的な意匠こそ日本の古い伝統に根ざした、真に民族的なものであると同時に、大東亜は言う迄もなく世界の建築を指導するに足るものであると思う。」

北欧と日本の伝統的な建築に見られる風土に根ざした慎ましく清純で日常的な性格、彼が「自抑的なもの」と名づけたものこそ、吉田鉄郎が自らの創作の原点に置こうとした建築思想の核心部分だったのだ

と思う。そして、この言葉を読むとき、戦時下に温められた思考は、彼が二つの中央郵便局へ込めたものを象徴していることがわかる。現代の都市は、吉田の希求したものを裏切るかのように、「周囲との調和や街全体としての統一美」をまったく顧みず、「自分自身を目立たせる」「自我的なもの」によって埋め尽くされようとしている。吉田が生きていたらどんな思いで見つめるだろうか。悲しいかな、私たちは、今、モダニズム建築の中に確かな形で流れていた「自抑的な意匠」という方法への手がかりを、この二つの中央郵便局と共にまるごと失いつつあるのである。

